

## 地図と現実

2021.3.2

ヨーロッパのある国で、庶民の中で語り継がれている貴族についての笑い話があります。

ある日、その国の貴族たちが集まって、山登りに出かけました。

しかし、集まったメンバーは、皆、実際の山登りの経験が無かったため、途中で道を見失ってしまいました。

そこで、現在、自分たちがいる場所を知るために、全員で地図を広げ、検討を始めました。

しかし、あいにく、この貴族たちは、皆、学者や知識人だったため、その検討は、まもなく、喧々囂々（けんけんごうごう）の議論になりました。

そして、延々と激しい議論を続けた結果、遂に、その知識人の中でも、最も賢いメンバーが、遠くの山の頂を指差しながら、誇らしげに言いました。

我々のいる場所が、分かったぞ。この地図によれば、いま、我々は、あの山の頂上にいる。

これは、高度な専門知識と明晰な論理思考を身につけた高学歴の人材が、実社会において活躍できない理由の一端を考えさせる話である。そして、決して笑えないヨーロッパの笑い話である。

なぜなら、いま、我々の社会には、こうした錯誤とも言えるものが溢れているからである。地図という理論の世界だけを考えるあまり、現実の世界にいることを忘れてしまう。そういった錯誤とでもいうべき事態が多いのではなかろうか。

このことは、コロナ禍にあっても見られることである。よく国民感覚、庶民感覚とのズレなどと言ったりする。ズレがあると、せつかくの政策などが有効に機能しなくなってしまう。政策には莫大な予算が注ぎ込まれる。

また、当時、世の中を震撼させたオウム真理教の事件を思い出す。優秀なはずの人材が、どんな教えに触れたかによって、生き方が変わってしまう例である。いくら頭がよく、才能に恵まれていても、よき教えに出会わなければ人生を誤ってしまうこともある。

「人間はできるだけ早くから、良き師、良き友を持ち、良き書を読み、ひそかに自ら省み、自ら修めることである。人生は心がけと努力次第である」ということを言っている方もいる。

「玉、琢かざれば器を成さず 人、学ばざれば道を知らず」玉も磨かなければ立派な器にはならない。人も学ばなければ立派な道を知ることはできない。東洋古典『礼記』にある言葉である。

「人生は邂逅である」と古人は言っている。一冊の書物との出会いもそうである。多くの人が出会いから二度とない人生をどのように生きるかのヒントを得られればと思う。

学ぶというのは、知識や技能だけではない。生き方や考え方について学ぶことも重要である。そして、思考力や判断力をつけなければならない。新しい学習指導要領において育成を目指す資質・能力の3つの柱の一つに「人間性等」という文言が入ったことは理にかなった時代の要請とも言えるのかもしれない。